

SHOW HEY シネマルーム

Data

監督・脚本：ニック・カサヴェテス
原作：ジョディ・ピコー『わたしのなかのあなた』（早川書房刊）

出演：キャメロン・ディアス / アビゲイル・ブレスリン / アレック・ボールドウィン / ジェイソン・バトリック / ソフィア・ヴァジリーヴァ / ヘザー・ウォールクvist / ジョーン・キューザック / トーマス・デッカー / エヴァン・エリン・ケノン / デヴィッド・ソーンント

私の中のあなた

2009年・アメリカ映画
配給 / ギャガ・コミュニケーションズ・110分

2009（平成21）年8月27日鑑賞

GAGA試写室

👁️👁️ みどころ

3人目の子供を人工授精までして生んだのは、なぜ？テーマは家族愛だが、キャメロン・ディアス演ずる強い母親像を軸に「My Sister's Keeper」という原題の重みがずっしりと。白血病、ドナー、臓器移植のあり方など個別テーマは深刻だが、主戦場は何と11歳の娘が両親を提訴した法廷！あなたを涙と感動に導くこと確実な名作に拍手！

* * * * *

3作連続星5つ、名作の誕生に拍手！

プレスシートは、本作のニック・カサヴェテス監督について「彼が追い求める映画とは、ストーリー性が高く、真実味にあふれ、誰もが共感を覚えるものでありながら、彼自身のインディペンデントなルーツに反しないという特徴を持つものである。」と書いているが、本作を観れば全くそのとおりで、私の採点は星5つ。私はそんな映画が大好きだから、彼の『ジョンQ -最後の決断-』（02年）（『シネマルーム2』137頁参照）も、『君に読む物語』（05年）（『シネマルーム7』112頁参照）も星5つ。実は私は本作がそんなニック・カサヴェテス監督の作品であることを知らないで観たのだが、結果的に彼の作品は3作連続して星5つの高評価となった。

本作の根本テーマは「家族愛」だが、映画としてそれを面白く描く仕掛けは、人工授精、臓器移植、訴訟などたくさんある。原作もベストセラーらしいが、本作は映画の方がわかりやすく感動的なのでは？プレスシートには「これを観ずして、何を観る。」など過激なほめ言葉が並んでいると思ったが、映画鑑賞後はあながちこれが誇張でないことがわかる。そんな名作の誕生に拍手！

3人目の子供はなぜ？

目下民主党への政権交代が確実な情勢だが、そうなると子ども手当が支払われることになるから、少子化に少し歯止めがかかるかも？日本では今ドキ子供が3人という家族は珍しいが、多分それはアメリカでも同じ？

消防士の父親ブライアン・フィッツジェラルド（ジェイソン・パトリック）と弁護士の母親サラ・フィッツジェラルド（キャメロン・ディアス）は、長男ジェシー・フィッツジェラルド（エヴァン・エリングソン）と長女ケイト・フィッツジェラルド（ソフィア・ヴァジリーヴァ）に恵まれ、4人家族で幸せな家庭を築いていた。したがって、別段3人目の子供は希望も期待もしていなかったようだ。しかるに、なぜこの夫婦は人工授精までして3人目の子供を早急に欲しがったの？それが、本作最大のテーマだ。

ちなみにそれを考える上で大きなヒントになるのが「My Sister's Keeper」という原題。人工授精の結果生まれてきたフィッツジェラルド家3番目の子供がアナ・フィッツジェラルド（アピゲイル・プレスリン）だが、彼女は生まれてから11歳の今日まで一体どんな役割を？

なぜ成功率91%の弁護士が登場？

日本でも2000年10月1日に弁護士の広告が解禁されたが、それ以降、やたら「債務整理」の宣伝が目立つ。週刊ダイヤモンド2009年8月29日号は「弁護士大激変！2万5041人の意外な実態」を特集し、そこでは過払い返還で稼ぐ弁護士・司法書士の実名が公開されている。私はこんな宣伝で依頼者を集めることには反対だが、時代の流れは既にそうになっているし、アメリカでは既に何十年も前からそうになっていたことは周知の事実。現にアナがネックレスを売ったりして貯めた700ドルを持ってアレグザンダー弁護士（アレック・ポールドウィン）を訪ねたのは、「勝訴率91%」と書かれた大きな看板などでアレグザンダー弁護士の実力を買ったため？

本作は時系列をバラバラにしていろいろな物語が展開されていくが、全体的なストーリーの軸は一定しているから、わかりにくさは全くない。しかしリーガルサスペンスの元祖であるジョン・グリシャムの小説、例えば『依頼人』（94年）なら少年マークが1ドルで女弁護士を雇うという話も面白く理解できるが、「家族愛」をテーマとした本作でなぜそんな弁護士が登場？しかもアレグザンダー弁護士を雇ったのは11歳のアナだが、アナはアレグザンダー弁護士に一体何を依頼するの？

キャメロン・ディアスが強い母親役を

イギリスのサッチャー元首相は「鉄の女」と言われ、アメリカ初の女性大統領を目指し

たヒラリー・クリントンも「強い女」の代表だが、はじめての母親役に挑戦したキャメロン・ディアスが本作では強い母親像を演じている。幸せだったフィッツジェラルド家を襲った悲劇は、ケイトが2歳の時に白血病に侵されていることが判明したこと。医学的なことはよくわからないが、2歳児の白血病患者となると骨髄移植手術の可能性などを考えるとその余命はわずかしかなければ？思わずそう思ってしまうが、ケイトは今13～14歳くらいだから10年以上生き続けたことになる。それは何故？どんな効果的な治療法が見つかったの？

適合する骨髄移植のドナーを探し出すのが大変な作業であることくらいは常識として私も知っているが、ドナーとなりうる可能性が高いのは身内らしい。ケイトの白血病が明らかになった時点で、必死に命を救う方法はないのかと訊ねるブライアンとサラに対して、医師が示した一つの選択肢は「法的に許されるかどうかはわからないが」と前置きした上で、遺伝子操作つまり人工授精によるドナーにピッタリの3番目の子供をもうけること。松本清張原作の『砂の器』を引き合いに出すまでもなく、人間の出生の秘密をめぐるドラマはたくさんあるが、映画冒頭にアナのナレーションによって語られる次女アナの出生の秘密は、長女ケイトを救うために「創られた」ということ、つまり「姉が健康だったら、私は産まれていなかった？」ということだ。

そんな決心で次女アナを産んだ母親サラは、弁護士のキャリアも結婚生活の楽しみも捨て、人生の全てを犠牲にしながらケイトのために生きてきたから、強くなるのはある意味当たり前。ケイトに対しては「頑張り、頑張り」とハッパをかけるし、アナに対しては白血球の提供やリンパ腺の注射、その他肉体的に負担のかかる注射（＝犠牲）を次々と実施してきた。そんなアナの、文字どおり献身的な犠牲によってケイトは今まで生きてこれたわけだが、今サラがアナに対して要請しているのは、2つしかない腎臓のうち1つをケイトに提供すること。もちろんそれはアナの命には直接関係ないが、そんな身体になれば一生無理が出来なくなるのは当たり前。したがって、サラはたしかに強い母親だが、どこかのシーンで自分で言っていたように、アナにとっては鬼のような母親？そんな強い母親を、キャメロン・ディアスが熱演！

弁護士の見どころ その1、審議却下の申立とは？

日本では09年8月3日から裁判員裁判第1号が実施された。それによって裁判がより国民に身近となった今、本作の弁護士として見どころを2つ紹介しておきたい。その1は、11歳のアナがアレグザンダー弁護士を正式に代理人として委任し、ケイトへの「腎臓提供を拒否する」旨の裁判を提起したことに対して、ケイトの母としてまた弁護士としてサラが対抗した「審議却下の申立」の可否。これはいわば、原告適格などの訴訟要件が欠け

ていることを理由として申立自体の却下＝門前払いを求める申立だ。

勝訴率91%を誇るアレグザンダー弁護士も、かつて実力派美人弁護士としてならした(？)サラ弁護士もよく知っているらしい本件訴訟を担当するデ・サルヴォ判事(ジョーン・キューザック)は、何よりもまず両弁護士に対してなぜこんな裁判が提起されることになったのかについて興味を示し、その点について両弁護士の意見を求めたが、それは当然だ。本件訴訟がアメリカのどんな法律にもとづいて審理されているのかはよくわからないが、しっかり見習うべきは、的を射た判事の質問と、それに対する要領良い両弁護士の受け答え。やはりすべからく一流の法曹はこうでなくっちゃ。

ちなみに私の弁護士としての見立てでは、デ・サルヴォ判事が「審議却下の申立」を判断するために「アナ本人と会いたい」と言った時点で、その結論はほぼ明らか。つまり訴訟指揮のあり方によって、ほぼ裁判官の結論は予想出来るわけだ。本作においてニック・カサヴェテス監督は、デ・サルヴォ判事がアナからどんな事情聴取したのかについては直接映画の中で描かない。逆にデ・サルヴォ判事自身がある事情で自分の子供を失ったことについてアナが踏み込んだ質問をするシーンを映し出すことによって、デ・サルヴォ判事の心の中を描き出していくところに注目。こんなシーンを観れば、法廷での判断が無味乾燥な六法全書の字句によって決まるのではなく、総合的な人間力によって決まるのだということがわかるはずだ。

弁護士の見どころ その2、証人尋問二態

サラの「審議却下の申立」が認められなかったため法廷での本格的な審理が始まったが、本作が映し出すのはちょっと珍しい証人尋問二態。つまり、アレグザンダー弁護士による証人サラへの尋問風景と、サラ弁護士によるアナへの尋問風景だ。前者の尋問の狙いは、いくらケイトの命を救うためとはいえ、判断能力のない幼少期のアナに対して再三注射を打ったり、手術台の上に乗せたのは、やり過ぎでは？ということ。それに対してサラはケイトの妹であるアナの同意があったと証言するが、果たして幼少期のアナにそんな同意能力は？

他方、サラが母親としてまた弁護士として証人アナに対する質問は、なぜケイトへの協力つまり腎臓提供を拒否するのか？という点。それに対するアナの答えは、私の身体は私のものだという至極もったもなものの。しかし、サラは一流弁護士である以前に、アナの母親だ。アレグザンダー弁護士に依頼して両親に対する裁判を提起した後、どこことなくアナの態度がおかしい、アナは何かを隠していると直感したサラは、ここで弁護士としての質問ではなく、母親としての質問を次々と。こりゃルール違反だと、アレグザンダー弁護士は再三異議を申し立てたが、デ・サルヴォ判事はそれを無視。さらにケイトの兄のジェシーが旁聴席からサラの質問に対して大声で回答したから、法廷は大混乱。しかし、冷静

沈着、人間を知り尽くしたベテラン判事デ・サルヴォ判事は、それらを見事に収拾していくからそこに注目。日本の裁判員裁判では到底体験出来ないと思われるこんなシーンを是非本作で鑑賞し、明日にも裁判員に選ばれるかもしれないあなたの参考としてもらいたい。

『ジョンQ』に続いて魅力的な医師が

『ジョンQ -最後の決断-』では、病院を占拠し息子への心臓移植手術を強要するデンゼル・ワシントン演ずるジョンQに対して、心からの理解を示し手術に応じようとするすばらしい医師レイモンド・ターナーが登場したが、本作にはそれに勝るとも劣らない医師チャンス（デヴィッド・ソートン）が登場する。チャンス医師がいつからケイトの主治医を務めているのかは知らないが、ケイトの死期が近いことを知っているチャンス医師はサラに対して現実を受け入れるようそれとなくアドバイス。また、そんなチャンス医師の考え方をしっかり理解しているのが、ケイトの父親でありサラの夫であるブライアンだ。

本作のクライマックスであるピーチのシーンは、死期を覚ったケイトが「ピーチを見たい」と話したところから始まり、実現する。保険会社をたぶらかすため(?) 病院の裏口からケイトを連れ出したらしいとアドバイスするチャンス医師の姿は、国民皆保険制度の実現に向けて医療改革を推し進めている現在のオバマ政権の姿をみると少し皮肉っぽい。そこまでケイトやアナそして両親のために尽くそうとするチャンス医師の姿には頭が下がる。

ケイトの治療方針をめぐるのは今日までずっとサラがイニシアチブをとってきたことは明らかだが、ケイトが最期に望んだ「ピーチを見たい」発言をめぐるのは父親としての圧倒的な存在感を発揮するブライアンの姿に注目！これまでの感覚どおりサラはアナとアレグザンダー弁護士との訴訟に勝ってケイトに腎臓移植手術を施し、ケイトの生命を長らえるというスタンスだから、ケイトがピーチなどに行けば「生命が危ない！」と考え、ブライアンがケイトを車に乗せて ピーチに行くのを断固阻止しようとしたのは当然だ。しかし、今や献身的にサラを手伝ってきたサラの妹ケリー（ヘザー・ウォールキスト）を含めて、サラの味方はゼロ。ブライアンの車にはもちろんアナが乗っているし、ケイトの弟のジェシーが乗っている。身体を張ってブライアンの車のキーを奪おうとするサラに対して、ブライアンが宣言したのは「ピーチ行きを邪魔したら離婚だ！」という何とも心強いもの。本作におけるブライアンは一貫して控えめな役柄に甘んじているが、ここだけはがぜん存在感を発揮。そんな「闘争」の末にやっと実現したピーチ風景に、あなたはきっと涙するはずだ。そして、ケリーの車に乗ってサラがそこに合流し、サラとケイトがそしてブライアンが抱き合う姿にさらに涙するはずだ。

2009（平成21）年8月28日記



100

「私の中のあなた」

(TOHOシネマズ梅田ほかで公開中)



© MMIX New Line Productions, Inc. All Rights Reserved.

こんな裁判も、裁くのはあなた！

阪本順治監督の「關の子供たち」(2008年)は衝撃だったが、本作はもっと衝撃、もっと感動。キヤメロン・ディアスの母親役サラは優しい夫と2人の子供と共に幸せな家庭を築いていたが、2歳の娘ケイト(ソフィア・ヴァジリーウア)が白血病だと判明した時、なぜ第3子アナ(アヒゲイル・プレスリン)を入

工授精で？ それはドナーの条件にピッタリだから。アナは姉が健康だったら産まれなかった。Keene (原題)なのだ。弁護士のカティアを含む人生の全てを捨てたサラが妹アナにドナーとしての多大の犠牲を求め、強権の母親に徹したお陰でケイトは今13歳。髪も眉も抜け落ちたがなお力

強く生きていた。そんな時11歳のアナが勝訴率91%の弁護士を雇い、母親の提供はイヤだと両親を提訴！ こんな深刻な親子間の裁判は前代未聞だ。裁判員裁判が始まった今、第1の焦点は審議却下の申し立てをめぐる両弁護士の対決。第2は証人席に立つサラとアナに対する厳しい尋問風景。法的

律解釈を越えた「大岡裁き」とも言つべき人間力に、弁護士35年の私も脱帽だ。
国民皆保険に向けオバマ大統領の医療改革が進行中だが、壁は厚い。「ジョンQ」最後の決断(02年)には、病院を占拠し医師を監禁してまで息子への心臓移植手術を迫る父親に、理解を示す素晴らしい医師が登場したが、ケイトの主治医の人間性にも注目！
「ビーチを見た」という瀕死のケイトの願い

が叶ったのは、主治医の決断と、闘う母親を支え墨子に徹してきた父親の「邪魔したら離婚だ！」との決断のお陰。奇跡はいつ？ どんな形で？
涙ながらにそう願つはずだがさて現実は何？ 「これを観ずして、何を観る」そんな宣伝文句が誇張でないことは私が保証したい。

大阪日日新聞 2009(平成21)年10月10日